

# 結核化学予防の服薬状況に関する一検討

## 結核集団感染事例の調査結果から

クボタミホ ヤナギサワ シゲル  
久保田美穂\* 柳沢 茂<sup>2\*</sup>  
ササキリュウイチロウ ハタヤマ ヨシユキ  
佐々木隆一郎<sup>3\*</sup> 畑山 善行<sup>4\*</sup>

**目的** 結核集団感染事例における化学予防の対象者に、アンケート調査による服薬状況と服薬継続に関連する要因について検討することを目的とした。

**方法** 結核集団感染事例の化学予防対象者88人に、服薬開始1か月後に服薬状況調査を、更に、6か月間の服薬を完了した81人を対象に、服薬継続に関連する要因の調査を実施した。調査には、いずれも自記式のアンケート調査票を用いて行った。

**結果** 1. 6か月間の化学予防を終了できた者は88人中81人であり、開始者の92%（男90.5%，女100%）であった。  
2. 81人（男67人，女14人）の終了者に対するアンケート調査では、69人（男55人，女14人）から回答が得られ、回答率は85.2%であった。  
3. 回答が得られた69人のうち、22人（31.9%）は6か月間毎日服薬していた。また、6か月間で服薬していない日が7日未満の者が37人（53.6%）であった。  
4. 服薬継続に関する要因では、初発患者の職場と同一フロアで勤務する人に、「毎日服薬」や「服薬しない日が7日未満」の服薬良好者が多い傾向にあった。  
5. 保健所が行った支援事業と服薬継続との関連については、服薬開始時に実施した「予防内服に関する医師や保健師による健康教育」、服薬開始1か月後に実施した「服薬状況調査及びそれに基づく医師又は保健師による個別相談」と「パンフレットの配布」が役立ったと回答する人が多かった。

**考察** 初発患者と同一フロアに勤務しない人に服薬中断者が多い傾向は、同じ接触者であってもフロアが違うという理由で予防内服に対する意識が低くなるということであり、今後注意が必要と考えた。

保健所が行った支援事業の中で、医師、保健師が直接担当した予防内服に関する健康教育、面接による相談が服薬継続に寄与していることが窺われ、フェイス・トゥ・フェイス（対面）による直接的な情報提供や従来からのパンフレットの配布という文書による情報提供も効果的であることが認識された。

今後の集団的な予防内服の事例で保健活動を効率的に行う上で重要な要因であることが示唆された。

**Key words** : 結核集団感染, 化学予防, 服薬継続, 直接的な情報提供

\* 長野県長野保健所

<sup>2\*</sup> 長野県衛生部保健予防課

<sup>3\*</sup> 長野県諏訪保健所

<sup>4\*</sup> 長野県飯田保健所

連絡先：〒380-8570 長野市大字南長野字幅下  
692-2 長野県衛生部保健予防課 柳沢 茂